

メッセージアウトライン マタイの福音書2：13～23 「彼はナザレ人と呼ばれる」

[13]「彼らが帰って行くと、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。『立って幼子とその母を連れてエジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデが幼子を捜し出して殺そうとしています。』」

ユダヤ人の王誕生を知らせる不思議な星を見て、はるばる東方からユダヤのエルサレムにやって来た博士たちは、時のヘロデ王や祭司長、律法学者たちからキリストはベツレヘムで生まれることを知らされ、出て行くと、あの星が彼らを幼子のいる家まで導き、ついに彼らは幼子イエスに会い、礼拝し、宝として黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。彼らはイエスのことを知らせるようにとヘロデに頼まれていたが、夢で彼のところに戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国へ帰って行った。この時、ヨセフの家族が住んでいたのは、マリアがイエスを産んだあの家畜小屋(ルカ2章)ではない。彼らはベツレヘムの別の家か宿にしばらく滞在していたのであろう。

そして博士たちが帰って後のある夜、主の使いが夢でヨセフに現れ、幼子イエスと母となったマリアを連れてエジプトへ逃げ、そこで主の使いが知らせるまでとどまっているようにと教えた。その理由はヘロデがイエスを殺そうとしていたからである。彼は自分の地位を脅かす者が現れると情け容赦なく抹殺しようとするのである。

[14-15]「そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ、ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して『わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した』と語られたことが成就するためであった。ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分ると激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた」

かつてイスラエル民族を苦しめたエジプトは、今度は救い主の家族の逃れ場となる。しかし、なぜエジプトなのか。イスラエルはダビデの後を継いだソロモン王の子レハブアムの時代に北王国イスラエルと南王国ユダに分裂する。そして北王国イスラエルはBC721年にアッシリヤによって滅ぼされる。南王国ユダはBC586年にバビロンによって滅ぼされ、多くの民はバビロンへ捕囚として連れられて行く。そして70年の後、バビロンに代わって支配していたペルシアの王キュロスの宣言によって

母国へ帰って神殿を再建することが命ぜられる。ダビデの血統であったゼルバベルとその同胞を最初とし、その後何回にも分かれて、多くのユダヤ人たちがイスラエルの地に帰還し、神殿を再建することができたが、かつてのダビデ、ソロモン時代のような繁栄は来ず、外敵の圧力や無気力、不信仰などにより民は失意のうちに歩まなければならなかった。そしてそのような時代が約400年続くが、この間に多くのユダヤ人たちは安全と生活のために他国へ出て行き、そこで働き、定住するようになった。エジプトもそのような国の一つであった。時代はギリシャ、そしてローマの支配する時代となり、もはやかつて出エジプトの時代にイスラエル人を苦しめたエジプトの王のような人物もいない。交通手段も発達し、世界各地に容易に移動できるようになっていた。それゆえ、主の使いがヨセフ一家に命じたエジプト逃避は当時は極めて自然な手段であった。当時エジプトの都市にはどこにもユダヤ人の移民が住んでいて、地中海に面したアレクサンドリアなどにはユダヤ人が百万人以上いたという。それゆえ、そのようなエジプトで生活することはヨセフの一家にとっては比較的容易なことであったであろう。さらにヨセフは大工として手に職を持っており、仕事を見つけることもできたであろう。→マルコ6:3

そして最も大切なことは、ヨセフ一家がエジプトに行くことは預言の成就に関わることなのであった。15節で引用されている預言のことばは旧約のホセア書11章1節のことばである。ホセアはBC8世紀のイザヤやミカと同時代の預言者。一義的にはこの預言はエジプトで奴隷状態であったイスラエル人を主が脱出させてくださった出エジプトのことを言っているが、その後のイスラエル、特に主なる神に対する不信仰と忘恩、道徳的、社会的腐敗によって滅びに向かっている北イスラエルの民へ、悔い改めて主なる神へ立ち返るようにとの呼びかけがなされているところである。

そしてこの預言がヨセフ一家がエジプトに滞在し、またエジプトから主の呼びかけによって出てくることにおいてメシヤ預言として成就するのである。

[16]「ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かれると激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた」

ヘロデの猜疑心と残忍ぶりは当時よく知られていた。彼はローマ皇帝に取り入ってユダヤの王とされるやいなや、最高議会の議員たちを殺し、次いで議会関係者三百人を殺した。また彼の妻マリアンヌ、姑のアレクサンドラ、そして息子たち三人も殺した。この残忍な王が博士たちに欺かれたことが分かれると激しく怒ったというこ

とは容易に想像できる。ヘロデはすでに博士たちから星の出現の時間を聞き出して、イエス誕生の時が分かっていたので、それから計算して二歳以下の男の子をみな殺せばユダヤ人の王として生まれたイエスを殺すことができるはずだと考えたのである。それゆえ彼はベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺すように部下に命じたのであった。

当時、ベツレヘムは小さな村でその近辺を入れても二歳以下の男の子は二十から三十人くらいであったと思われる。ヘロデにとってはこのようなことは朝めし前のことであつたであろう。

この事件で教えられることは、イエス・キリストを抹殺しようとする人間の恐ろしさである。これは一人ヘロデだけではない。自分の思い通りの生き方をしようとしているすべての人は、このような思いを内包している。もしイエス・キリストが自分の野望をくじき、その生活、生き方を非難すると思えば、何としてもキリストを取り除いてしまいたいと思うのである。これは自己中心の心から出てくる罪である。神によって最初に創造された人間アダムとエバの長男カインが弟アベルを殺したのもこの罪ではなかったか。→創世記4章

[17-18]「そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。『ラマで声が聞こえる。むせび泣きと嘆きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。子らがもういないからだ。』」

マタイはこの事件を旧約のエレミヤ書31:15の預言の成就であると言う。エレミヤはBC7世紀～6世紀にかけて預言活動をしたユダの預言者。彼の活動はBC586年にエルサレムが滅亡した数年後まで続いた。彼は嘆きの預言者と言われるほど、その預言は悲哀に満ちている。

「ラマ」はエルサレムの北約8キロメートルの地。エルサレムが陥落し、バビロンに捕囚として捕らわれて行く前に集められた場所と思われる。「ラケル」はヤコブ(イスラエル)の妻。彼女はベニヤミンを産んだ時、難産のために死に、ベツレヘムへの道の途中で葬られた。→創世記35:16~20

そこはラマにも近かったのであろう。エレミヤはイスラエルの民がその罪のゆえにバビロンへ捕え移されていく時、彼らが通り過ぎる道のかたわらで、その子孫であるイスラエルのために嘆くラケルの姿を描写しているが、それと同様の悲しむべき事件がベツレヘムで起こったので、マタイはそのことと重ね合わせているのである。

[19-22]「ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが夢で、エジプトにいるヨセフに現れて

言った。『立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちを狙っていた者たちは死にました。』そこでヨセフは立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に入った。しかし、アルケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くのを恐れた。さらに、夢で警告を受けたので、ガリラヤ地方に退いた」

ヘロデはベツレヘムの幼児殺害の後、しばらくして70歳で死んだ。彼が死ぬ時、競技場に監禁していたユダヤ人の有力者たちを自分の死とともに殺害し、ユダヤ人たちに悲嘆の叫びを起こすことを命じていたが、それは実行されず、彼らは釈放された。ヘロデという暴君からの解放は悲しみではなく喜びをもたらすことになった。

エジプトにいたヨセフは、以前と同様に夢で主の使いからヘロデが死んだことと、エジプトを出て妻子とともにイスラエルの地に帰ることを告げられ、その地に戻って来た。しかし、ヘロデの子で残忍なアルケラオがユダヤを治めていたのでユダヤへ行くのを恐れた(彼は王位に就くと彼を排斥しようとする不平分子たち三千人を殺した)。この時ヨセフは、さらに夢で警告を受けたのでイスラエル北部のガリラヤ地方へ退いた。

[23]「そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して『彼はナザレ人と呼ばれる』と語られたことが成就するためであった」

ナザレはルカ1:26, 2:4を見ると分かるようにヨセフとマリアの故郷であった。ナザレはガリラヤ地方の南方にあり、旧約聖書にはその名も出てこない小さな村で、ガリラヤ湖南端から約20キロメートル西にある小高い丘の中腹にあった。

ガリラヤ地方はユダヤ人よりも異邦人との関係が強い地方であった。ナザレはその丘を登ると、西に地中海が一望でき、近くには重要な商業道路が走っており、アジア、アフリカ、ヨーロッパに通じていた。そこはローマの軍隊が通り、また、多種多様な人種、人々が生活のために行き交っていたことであろう。イエスはこのような環境の中で育たれたのである。

「彼はナザレ人と呼ばれる」とはどういう意味であろうか。文字通りのことばは旧約聖書にはないがナザレ人は方言を使い、そこは商人、農夫、羊飼いの住む所であり、田舎であり他の大きな町や都会から見れば蔑みの的であった。そこは全く世の救い主、メシヤが住むにはふさわしい場所ではなかった。「彼はナザレ人と呼ばれる」とはそこで育たれたイエスに対して、軽蔑を込めた呼び名であったのであろう。

詩篇22:6, イザヤ53:3のことばは、そのような意味でイエスにおいて成就している。

いったいなぜ、世の救い主となるお方が家畜小屋で生まれ、なぜその幼年時代には名もない田舎で育ち、見栄えもなく、人々から蔑まれ、のけ者にされるような生き方をしなければならなかったのか。それは、ほかでもない本来彼のものであるべき民が彼を受け入れず、不信仰によって彼を追い払ってしまったからである。→ヨハネ1:11

私たちは毎日の生活の中で、このイエス・キリストを軽蔑の意味を込めたナザレ人としてはいないだろうか。王の王、主の主、救い主、喜びをもって心から信じ従うお方としているであろうか。自分の心の中の王座をイエス・キリストに明け渡しているであろうか。それともキリストをわきに追いやり、自我、自己中心、唯我独尊の思いが相変わらず心の中に王座を占め、私たちを突き動かしているのだろうか。

私たちも主を知らないこの世の人々に、主を信じる信仰のゆえに軽蔑され、疎外されるようなことがあるかもしれないが、主イエスもそのような道を歩まれたことを思い、信仰と忍耐と良き生き方を通して救い主イエス・キリストを証しし、救いの福音を伝えていく者になりたい。→Ⅱテモテ4:2